

テキスト言語学の現状—日本独文学会1985年度 秋季研究発表会シンポジウム「テキスト研究」 の各報告を巡って

佐藤 厚*・進藤 俊一

Zur gegenwärtigen Textforschung

Atsushi SATO . Shunichi SHINDO

(昭和60年10月31日受理)

Die vorliegende Arbeit ist ein kurzer Bericht über das Symposium "Textforschung" auf der Tagung der Japanischen Gesellschaft für Germanistik im Herbst 1985.

Die Textlinguistik kann als jüngste der linguistischen Disziplinen gelten. In letzter Zeit wird ihr vermehrt Aufmerksamkeit gewidmet.

Das Symposium beschäftigte sich mit einigen Problemen der Textforschung und mit den Beziehungen zwischen der Textforschung und anderen Disziplinen, z.B. Diskurs, Stilanalyse, Märchenanalyse und Fremdsprachendidaktik.

Im folgenden werden einige der erörterten Hauptpunkte aufgegriffen und soweit wie möglich kurz kommentierend dargestellt.

1.はじめに

言語学の中で最も新しい分野といわれる1)テキスト言語学は近年特に注目を集めている。

従来の言語学もしくは文法研究において、その対象となったのは、最小単位である音素から、最大かつ最も基本的な単位として一般的な文までであった。

しかし、文を対象とした分析は欠かせないものの、この文の視点だけでは見えてこない現象も多い。我々が伝達のために言語を使う場合、話し言葉でも、書き言葉でも、たいていはいくつかの文を連ねて情報を伝えようとする。従って、実際の生きた言語においては、文は決してそれだけで自律している存在とはいえない。文は、その使用者や場に依存する側面も持つが(いわゆる語用論からの観点である)、また他の文とも相互に依存し合い、関連性を保っているのである。作文や手紙を書く時、その中の1文を手直ししたり削ったりすると、他の文まで手を入れなければならなかった経験は誰にもあることであろう。これは文相互が有機的なつながりを持っている証拠である。2)

このように、文の枠をこえた、テキストと一般に

* 秋田工業高等専門学校 独語 非常勤講師

呼ばれる、文の連続体に対する研究がすなわちテキスト言語学となるが、まだ新しい分野のためか、まだ解明されるべき点が余りにも多く残されているのが現状である。3)

そして、これまでの研究を踏まえ、機が熟したとして、日本独文学会1985年度秋季研究発表会(於岩手大学人文社会科学部)において「テキスト研究」と題して2日にわたってシンポジウムが催されたのである。このシンポジウムは1日めが基礎編「テキスト研究の諸相」、2日めが応用編「テキスト研究の現実的問題」というように二部構成になっている。

テキスト言語学の研究、ではなくして、単にテキスト研究となっているのは、言語学のみならず(中心であることは確かだが)、コミュニケーション理論、心理学、人類学等の様々な分野の学問がかかわってくるからであり、広い視野が必要となるのである。

次にまず、基礎編の各報告についてみてみることにする。

2.テキスト研究I・基礎編「テキスト研究の諸相」 における各報告について

最初に菊地武弘氏(立教大)が「テキスト研究の

問題点」と題して発表した。この中で菊地氏は特に「テキスト種類」(Textsorten)という概念を取りあげ、これにしばって報告した。すなわち、通常の言語使用者は、たんに内容を伝達、理解するだけでなく、適切なタイプのテキストを産出し、また一定のタイプのテキストとして解釈する能力をもっている。別のいいかたをすれば「テキスト種類」を区分することができる。にもかかわらずテキスト種類という概念は前理論的な段階にとどまっており、これを画定する明確な判断基準はまだ与えられていない。この報告でテキスト研究の困難点のひとつとしてテキスト種類を取りあげ、その区分を試みた、としている。たとえば、テキスト内的及びテキスト外的な区分の判断基準、またテキスト種類の下位区分についてであった。

次は大矢俊明氏(東京外大院生)、下川浩氏(独協大)による「テキスト文法の問題点」であった。この報告のテーマはテキストにおける文の配列の問題である。つまり、テキストに含まれる文相互の関係は、個々の文の論理的内容に基づく論理的关系と、様々の対象を指示する表現相互の関係に基づいた文相互の機能的関係とに区別される、として、文の配列に関する問題は、テキストの論理的关系・機能的関係の両側面から考察される、と続ける。更に、実際の例、すなわち、具体的にテキストを使って説明した。

非常に懇切丁寧な説明、報告であったが、筆者個人としてはなかなか理解に苦しんだ報告であった。記号をいろいろ駆使したものであったが、かえってわかりづらかったのが非常に残念であった。

もちろん、このほかにもテキスト文法の問題点はある。

3番めは日置孝次郎氏(岩手大)による「文化コンテキストの問題点」という報告であった。これは、まず、テキスト言語学で意味するテキストとは、一定の諸条件が満たされる発話全体であるが、このテキストとは、これを構成する文の単なる総計と同一ではない。そこに文のレベルでは現われない話者の意図、発話状況あるいは話者/聞き手が共有する世界知識なども含まれるからである。そしてこの世界知識を文化コンテキストと呼ぶ、として一例をあげて説明をする。すなわち、

Die Tür seines Arbeitszimmers ist geschlossen.

Wir müssen die Polizei holen.

この2文間には飛躍がある。ところがアメリカの場合、この対応する2つの文の間にはドイツの場合

の様な飛躍は感じられないという。その理由はアメリカの官庁の慣行では、勤務中の事務室の「ドアは開いている」ことになっており、この文化コンテキストが作用して、「開いているべきドアが閉じている⇒異常状態」という連想を可能ならしめ、2つの文の結束性を生み出すことになるからである。

そして文化の中にはこの様に変わり易いものから、変り難いものまである。たとえば、ゲルマン文化最大の祭りの冬至/夏至祭の例をあげ、更に具体的に文学テキストにおける文化コンテキストの解釈を試みた。

以上なかなか興味深くかついろいろと参考になった報告であった。今回の報告の中で唯一言語学の枠をこえ、他の民俗学、文化人類学の領域と関連する、交わったテキスト研究の報告となった。

最後は藤井文男氏(岩手大)の「『文法』の概念に対する科学論的考察」であったが、題とは直接関係なく、ドイツ語のみならず中国語をも例に出して語順の問題、すなわち動詞の位置(後置)について発表した。

中国語の例にはいささかとまどってしまったが、十分に研究の参考になった。

3. テキスト研究Ⅱ・応用編「テキスト研究の現実的問題」における各報告について

最初に丸井一郎氏(愛媛大)が「談話行為とテキスト」と題して発表した。談話行為の観点からテキストについて考えると、様々な興味深い問題に出会い、そして中心的な問題は2つあって、1つは言語テキストと言語外テキストの関連、もう1つは固定された対称としてのテキストと機能体としてのテキストに関わるものである、という。

次は能登恵一氏(岩手大)による「テキスト言語学と文体分析」であった。主として結束構造(Kohäsion)という観点からのテーマ展開の可能性が文体分析の上でどの程度まで有効性と妥当性を持つものであるかを、具体的に文学作品の分析例をあげて説明した。

3番めは川島淳夫氏(独協大)・高橋由美子氏(上智大)による「テキスト分析とMärchenの分析」という報告であった。Beaugrande, R.-A. de/Dressler, W. U. (1981)は「テキスト性」(Textualität)の7つの基準を満たすものをテキストと定義しているが、この報告においてはそれらの基準のうちから、「結束構造」(Kohäsion)と「結束性」(Kohärenz)に焦点をしばって、Grimmの2つのMärchenを比較し、両

方のテキストの間にみられる「変項」と「不変項」
に関して考察した。

最後はGötz Wienold 氏（コンスタンツ大）の
「Textlinguistik und Fremdsprachendidaktik」で
あった。特に外国語の授業それ自体を一つのTextと
見なす考え方、視点は極めて興味深い、おもしろい
ものと思われた。

4. まとめ

筆者自身、テキスト言語学の勉強はまだ充分では
ないのでそれぞれの報告をしっかりと理解したとは
いえませんが、どの報告もこれからのテキスト言語学
の研究にとっておおいに指針となるものであること
は間違いない。また、このシンポジウムを機に、テ
キスト言語学、いやテキスト研究が学際的に更に発
展していくことを願うものである。

注

- 1) Sowinski, B: Textlinguistik, Kohlhammer,
Stuttgart, 1983, S.19
- 2) 石黒昭博ほか：現代言語学序説，山口書店，
1984，S. 175
- 3) 日本独文学会1985年度秋季研究発表会研究発
表要旨，S.28(なお，このほかにも，「討議
資料」も合わせて参考にさせて頂いた。)

参 考 文 献

1. Weinrich, H: 時制論，脇阪豊ほか共訳，紀伊國
屋書店，1982.
2. Weinrich, H: 言語とテキスト，脇阪豊ほか共訳，
紀伊國屋書店，1984.
なお，文中のBeaugrande, R.-A. de/ Dressler,
W. U. (1981) は「テキスト言語学入門」（池上嘉
彦ほか共訳）として紀伊國屋書店から1984年に出版
されている。